

高たか天まの原はらに神かむ留づまり坐ます 皇すめ親ら神がむつ漏かむ岐ろ神み漏み美みの命みこと以もちて 八や百ほ万よろつ

の神かみ等たちを 神かむ集つどへに集つどへ賜たまひ 神かむ議はかりに議はかり賜たまひて 我あが

皇すめ御み孫まの命みことは 豊とよ葦あし原はら水のみづ穗ほの国くにを 安やす国くにと平たひらけく知しろし食めせと

事こと依よさし奉まつりき 此かく依よさし奉まつりし国くに中ちに 荒あ振らる神かみ等たちをば

神かむ問とはしに問とはし賜たまひ 神かむ掃はらひに掃はらひ賜たまひて 語こと問とひし磐いは

根ね 樹き根ね立たち 草くさの片か葉はをも語こと止やめて 天あめの磐いは座くら放はなち 天あまの

八や重へ雲くもを 伊い頭づの千ち別わきに千ち別わきて 天あま降くだし依よさし奉まつりき

此く依さし奉りし四方の国中と

大倭日高見国を

安国と

定め奉りて 下つ磐根に宮柱太敷き立て

高天原に千木高知

りて 皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて

天の御蔭 日の御蔭

と隠り坐して 安国と平けく知ろし食さむ国中に 成り出で

む天の益人等が 過ち犯しけむ種種の罪事は 天つ罪 国

つ罪 許許太久の罪出でむ 此く出では 天つ宮事以ちて

天つ金木を本打ち切り 末打ち断ちて 千座の置座に置き足

らはして 天つ菅麻を本刈り断ち 末刈り切りて 八針に取

り辟きて 天つ祝詞の太祝詞事を宣れ

此く宣らば 天つ神は天の磐門を押し披きて 天の八重雲を

伊頭の千別きに千別きて 聞こし食さむ 国つ神は高山の

末 短山の末に上り坐して 高山の伊褒理 短山の伊褒理

を搔き分けて聞こし食さむ 此く聞こし食してば 罪と云ふ

罪は在らじと 科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く

朝したの御霧みぎり 夕ゆふの御霧みぎりを 朝風あさかぜ 夕風ゆふかぜの吹ふき払はらふ事ことの如ごとく 大おほ

津辺つべに居をる大船おほふねを 舳解へとき放はなち 臚解ともとき放はなちて 大海原おほうなばらに押おし

放はなつ事ことの如ごとく 彼方をちかたの繁木しげきが本もとを 焼鎌やきがまの敏鎌とがまも以もちて 打うち掃はら

ふ事ことの如ごとく 遺のこる罪つみは在あらじと 祓はらへ給たまひ清きよめ給たまふ事ことを 高たか

山ぐまの末すゑ 短山ひきやまの末すゑより 佐久那さくな太理たりに落おちたぎつ 速川はやかはの瀬せ

に坐ます 瀬織津比売せおりつひめと云いふ神かみ 大海原おほうなばらに持もち出いでなむ 此かく

持もち出いで往いなば 荒潮あらしほの潮しほの八百道やほちの八潮道やしほちの潮しほの八百会やほあひに

坐ます速はや開あき都つ比ひ売めと云いふ神かみ 持もち加か加か吞のみてむ 此かく加か加か吞のみ

てば 氣い吹ぶ戸どに坐ます氣い吹ぶ戸ど主ぬしと云いふ神かみ 根わの国くに 底その国くにに氣い吹ぶき

放はなちてむ 此かく氣い吹ぶき放はなちてば 根ねの国くに 底その国くにに坐ます速はや佐さ須す

良ら比ひ売めと云いふ神かみ 持もち佐さ須す良らひ失うしな 此かく佐さ須す良らひ失うしな

てば 罪つみと云いふ罪つみは在あらじと 祓はらへ給たまひ清きよめ給たまふ事ことを 天あまつ

神かみ 国くにつ祇かみ 八や百ほ萬よろづ神のかみ等たち共ともに 聞きこし食めせと白ます